

雑誌『アタランタ』と女性たち

加塩 里美

Atalanta and Female Victorians

Satomi KASHIO

Abstract

This paper deals with girls' education through the Victorian magazine, *Atalanta*, which targeted middle class unmarried women. This magazine made its first appearance in 1887 at a time when the imbalance of the population between men and women had become so serious. Women who were unable to find marriage partners had to seek other ways of life by themselves. The editors aimed to make *Atalanta* a guide for women who were trying to find jobs. This paper explains the magazines issued from October 1887 to September 1893, for they were edited by Meade, a famous author in those days.

The paper consists of three chapters. Chapter 1 treats the social circumstances which had an influence on the policy of the editors of *Atalanta*. Chapter 2 concentrates on the characteristic figures of the magazine, "Atalanta Scholarship and Reading Union" and "Brown Owl", connected with "Atalanta Letter-Bag". In Chapter 3, Japanese women who appear in this magazine are focused on. Two stories about Japanese women are in the magazine, and a letter from Taki in Tokyo appears in 'Brown Owl'. Through the investigation, the lives of Japanese women in comparison with those of British are brought to light.

キーワード：1. ヴィクトリア時代, 2. 雑誌『アタランタ』, 3. 女子教育,
4. 日本文化への関心, 5. 福澤滝

Key Words：1. The Victorian Era, 2. *Atalanta*, 3. Girls' Education,
4. Interest in Japanese Culture, 5. Taki Fukuzawa

日本語要旨

10代から20代前半の中流階級女性層を読者のターゲットとした雑誌『アタランタ』がイギリスで創刊された1887年当時は、ヴィクトリア朝の後期にあたる。雑誌や新聞などの定期行物が花盛りであったこの時代に、『アタランタ』は、文芸雑誌として高い評判を得た。それは、「女余り現象」が顕著となった時代を生きるため、自立と自活を目指す女性たちを導いていこうとする編集者の意識が、この雑誌の質の高い内容に表れているからである。そこで本稿では2008年から2010年にかけて復刻版として出版された6年分の雑誌『アタランタ』について検証を加え、どのような雑誌であったのかを明らかにする。

第1章「ヴィクトリア時代と『アタランタ』」では、時代背景と女子教育という側面から『アタランタ』の編集方針やその役割を探る。

第2章「『アタランタ』の中の特徴的な企画」では、この雑誌の内容から特徴的な2つの記事で

あるスカラシップ・コンペティションと、ブラウン・アウルとレター・バッグを取り上げる。読者の教養を高め、意見の形成を意図したこれら2つの記事の内容を考察対象とする。

第3章「『アタランタ』にみられる日本」では、雑誌の中に描かれる日本を取り上げる。ミードが編集者として携わった6年間の『アタランタ』には、日本人を物語の中心に据えた2作品が含まれている。イギリス本国に住む読者に、日本を紹介する意図があったこの2つの作品に書かれた内容からは、当時の日本人の様子やイギリス人の日本人に対する印象が浮かび上がる。また、ブラウン・アウルで採用された東京に住む1人の日本人女性「タキ」の投書からは、時代の牽引力となった中流階級の女性の生き生きとした様子がうかがえる。そこで当時の新聞や資料を基にして、タキの人となりや育ってきた家庭環境などを検証し、若き「アタランタ」の姿を明確にする。

第1章 ヴィクトリア時代と『アタランタ』

1887年に創刊された定期刊行物『アタランタ』(*Atalanta*)¹ やその前身である *Every Girl's Magazine* (1877-1887) の普及の陰には、イギリスにおける鉄道網の発展と、産業革命、初等教育法成立と、それに伴う識字率の伸び、さらには選挙法改正などが大きく影響している。そこで、まず『アタランタ』創刊の背景にあるこれらの歴史的事実を把握しておく必要がある。

第1節 時代背景

1830年にマンチェスターとリバプールの区間で開始された鉄道輸送は、その後の20年間でイギリス全土を覆うまでに至った。鉄道での移動は、馬車での移動に比べると、はるかに高速で走る。当然のことながら、車窓から旅の途中を楽しむことがむずかしくなった。それゆえ人々は移動途中ではなく、降車してから目的地で楽しむようになった。それに伴って、車内では読書をするようになり、駅構内の書店では、独特の貸本制度が発達した。各駅に店舗を拡大した貸本業者の中には、ミューディーズ (Mudie's) という業者がいる。このミューディーズというのは、1816年から1890年まで営業していたイギリスの書籍商の名前で、とくに貸本屋 (1842年～) の経営で評判をとった店である。

『アタランタ』の、英文学を紹介するページの“*Atalanta Scholarship & Reading Union*”の中に、シャーロット・ブロンテの『ヴィレット』を少女たちに勧める担当執筆者が、誰も『ヴィレット』をミューディーズで求めないことを嘆く記述 (1889年3月号) がみられる。このことは、ミューディーズが当時、広く人々に知られていたことと、その貸本業が盛況であったことを裏付けている。

1 雑誌『アタランタ』は、ギリシャ神話の美しく足の速い女狩人アタランテの名前に由来している。アタランテのもとを訪れる求婚者は皆、彼女と足の速さを競うことが求められ、彼女との競走に敗れた者は殺されたという。求婚者のひとり、ヒッポメネス (Hippomenes) は競走の途中で3個の金のリングを落とし、彼女がそれを拾う間に追い越して競走に勝った。アタランテは彼と結婚したのち、アフロディテの怒りに触れ、雌ライオンに変えられてしまった、というのがギリシャ神話のあらましである。ヴィクトリア朝の後期は、フェミニズムが特に盛り上がりを見せたことから、「女性の時代」の黎明期と言われている。この時代思潮を背景に創刊された本誌は、ギリシャ神話のアタランテから名前を採っていることから分かる通り、女性にとっての目的を見据え、その純粋で高貴な目的へと韋駄天のごとく駆けていく若き「アタランタ」たちに大きな期待を寄せる構成となっている。

また、貸本屋として有名な店の名前をあえて挙げているということからは、『ヴィレット』を購入して読む金銭的余裕のある読者層ばかりではなく、そうした余裕のない低所得の読者層にも、貸本でもいいから、とにかく読んで欲しいという執筆者の気持ちが表れていると考えられる。実際、雑誌『アタランタ』は、定期的に購入して読む読者ばかりではなく、公立図書館にも置かれていた²ことで、購読料を払わなくても自由に読み、知識を得ることができるようになっていたのである。

鉄道の発達は、人々の移動や物流の発展に貢献したばかりでなく、電信、電報、郵便制度の整備につながり、情報の大衆化に大きく寄与した。1840年にできた郵便制度は、ローランド・ヒルによって、1ペニーの切手で遠く離れた人との通信を可能にした。このことにより、個人間のコミュニケーション手段の発達ばかりではなく、書籍郵便、小包郵便などが、全国的な商品流通の手段として促進された。こうしたことが、『アタランタ』をはじめとする様々な新聞や雑誌などの書籍類を、イギリスのどこにいても入手できるようにした。

『アタランタ』の創刊号に掲載されている“*Our Prize Competition*”の優勝エッセイには、今まで読んできた*Every Girl's Magazine*をバインダー仕様にしてもらうためにくくって送る際、発送手配をする前に、もう一度雑誌をめくって感慨にふける少女の姿が描き出されている。郵便の発達により、書籍の入手が容易になり、読み終わった雑誌類の体裁を変えて送り返してくれるサービスも整っていたことが看取される。

さらには、『アタランタ』として新しく生まれ変わったことで、通信添削という教育の手段が加わった。後に詳述するが、“*Atalanta Scholarship & Reading Union*”という企画は、各号で取り上げた有名な作家に関するテーマ・エッセイを書かせて、英文学についての教養を高めさせることを意図していた。それはすなわち、当該作家の担当執筆者が選んだ推薦図書を読み、テーマに沿って自分の言葉でエッセイを書くという段階的作業により、“*Atalanta Scholarship & Reading Union*”の読者に読解力や表現力をつけさせる、という狙いを持っていたのである。

ここで注目すべきは、『アタランタ』創刊当初、年間2シリング6ペンス支払う読者（*Simple Subscriber*）と、その上さらに2シリング6ペンス、つまり合計で5シリング支払う読者（*Privileged Subscriber*）の2種類が存在していたことである。年間に5シリング支払う会員には、自分が書いたエッセイを添削して返却してくれるというサービスが特別に付いていたのである。現代でこそ、通信添削指導は一般的で、広く知られているものの、郵便制度が1840年に成立したことを考え合わせると、雑誌を媒体とし、添削指導も取り入れて、女性を間接的に教育しようとするこの方法は、当時としてはかなり目新しく、画期的な試みであったと言わざるを得ない。

書籍全般に対する需要が高まってきたということは、民衆教育が普及し、識字率が上がったことや、ジャーナリズムをマスコミ（大量伝達手段）と呼ぶことができるような、大衆社会の基盤整備にもつながってくる。蒸気機関を取り入れた産業革命の成果が印刷能力の改善を促し、1814年には、まず新聞が手押し印刷機から蒸気力を利用した機械刷りに転換された。

さらには、雑誌、新聞の発行に課されていた税金であるスタンプ税が1855年に廃止されたこ

2 木原貴子・依岡道子「ヴィクトリア朝後期における女性の知的職業 ——雑誌 *Atalanta* の役割」、『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』2002年、298ページ。

とにより、読者にとっては、安い負担で、新聞や雑誌の定期購読が可能になった。こうした時代状況が、『アタランタ』やその他の雑誌類にとって、購読者数を増加させることに有利に働いたのである。

第2節 時代の変化と女子教育

政治的背景が、この雑誌に与えた影響も重要である。労働者階級に選挙権が与えられたことで、それまでは支配者階級の特権であった国を動かす力が、日々の糧を稼ぐために働く階級にも委ねられることとなり、成人男子のみではあったが、国民の代表を選ぶ基盤が確立されたのである。1865年の議会選挙の際、J. S. ミルが「婦人参政権」を公約に掲げて以来、長い運動の末、ようやく1918年に女性に選挙権が与えられた。『アタランタ』が発行された1880年代後期以降はちょうど、女性参政権運動に盛り上がりを見せていた時期に当たる。女性たちは、新しい時代の到来を予感し、また他方「女余り現象」という、閉塞感を伴う状況に身を置いているがゆえに、彼女たちの間では、自立、自活の気運が高まっていた。そのためには、何よりもまず学問を身につけなくてははいけなと決意した女性たちがますます増加していったのである。

時期を同じくして、民衆教育に対する考え方にも変化が出てきた。産業革命期には生活の糧をかせぐために、ほとんど停滞していた民衆教育が重要視されるようになった。子供たちは、産業革命期には、読み書きを習うよりも、日々の糧を稼ぐために労働を強いられることの方が多かった。彼らは、体が小さいので、大人では入り込めない炭鉱の坑道や、紡績機械の隙間に入り働くことができ、有能な働き手となっていたのである。また、女性たちは児童労働者と同様、労働者の中では一番搾取された存在であった。この事実をふまえ、1842年には「鉱山法」が成立し、10歳以下の児童や婦人の地下炭鉱内での労働が禁止となった。しかしその後も、少女を含めた女性労働者は、婦人服、紳士服業界、釘、マッチ製造業などで、苦役を強いられていたのである。³

さらに、民衆教育の普及が遅々として進まなかったのには、大きな理由があった。その1つは、教育は個人の責任であって社会的な問題ではない、というレッセ・フェールに基づく思想から、民衆教育が放置されたということである。もう1つは、支配階級の人々には、下の階級の人たちが知識を身につけることは、急進的な思想を持つことにつながるという懸念があったという点である。教育は、彼ら労働者の社会的不満をあり、現存秩序を維持したい支配階級にとって危険であると考えたのである。

しかしながら、レッセ・フェールの思想は、大気汚染や都市環境の悪化など多くのひずみを生みだしたことから、方向転換を図らざるを得なくなってきた。貧民に教育は無用だという時代精神にも変化が生じ、1833年以降、政府は国庫補助金による教育投資として、学校建設資金や維持費を随時支給するようになったのである。その成果として、下の表からわかるように、50年代以降、識字率は着実な伸びをみせる。

3 毎日、午前6時から午後12時までほとんど休まずお針子として働いても、極貧の暮らししかできず、やむなく売春婦となってわずかな金を稼ぎ、自分や子供らのパンを得た多くの女性たちの手記は、その悲惨な状況を如実に物語っている（ヘンリー・メイヒュー『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』松村昌家、新野緑編訳、ミネルヴァ書房、2009年、37-89ページ参照）。

1850年・・・69%
1860年・・・74%
1870年・・・80%—初等教育法成立
1880年・・・86%
(1887年『アタランタ』創刊)
1890年・・・93%
1900年・・・97%

『大英帝国 最盛期イギリスの社会史』より⁴

『アタランタ』を定期購読するには、最低でも年間2シリング6ペンスは必要であったが、公共の図書館にも置かれたことで、初等教育の恩恵を受け、ある程度は読む力を持ち、自分の氏名を署名できるようになった労働者階級や、中流階級の中でも低い身分の読者が手にすることもできるようになり、知識を得る機会も増えていったのである。

当時の中流階級の女性たちの教養は、ガヴァネスによって施されるものや小さな私立学校、寄宿舎学校で身につけたもののいずれかであった。学校では、ドイツ語やフランス語、音楽や絵画などの授業が、カリキュラムに沿って行われていた。

19世紀半ばの教育改革では、女性の大学入学も認められるようになった。ケンブリッジ大学が女性のためのガートン・カレッジ (Girton College) を開いたのは1869年であり、同様に、オックスフォード大学が女性のためのレイデイ・マーガレット・ホール (Lady Margaret Hall) を開校したのは1881年である。しかしながら、両大学とも女性が学士号を取れるようになったのは、20世紀になってからのことであった。その上、大学への入学が認められたとはいえ、指氏が次のように指摘するように、女性たちにとって、大学進学は決して容易ではなかった。

そういった女性への世間の目は依然として厳しかった。しかも、授業料は高く入学が可能なのは相変わらず裕福な一部の家庭の子女に限られていた⁵。

これらのことから理解できる通り、少しずつ女子教育が広がりを見せ、女性の社会進出が認識されてきたとはいえ、まだ多くの障害が存在していたことも事実である。

雑誌『アタランタ』は、このように女性をめぐる環境に変化が起きつつあった時代に登場し、教養を高め、自立を目指す女性の手助けとなるべく、通信教育を取り入れた独自の方法で貢献した。雑誌や新聞などの活字文化が花開いた時代にあって、この雑誌は女子教育に力を入れ、すぐれた文芸雑誌としての特徴を持っていたのである。次章では、その内容からこの雑誌が目指した読者像を見てみたい。

4 長島伸一『大英帝国 最盛期イギリスの社会史』講談社、1989年、118ページ参照。

5 指昭博『イギリスの歴史』河出書房新社、2004年、122ページ。

第2章 『アタランタ』の中の特徴的な企画

本雑誌『アタランタ』は、毎号60ページほどで構成された月刊誌で、繊細なタッチの挿絵を添えた連載小説や詩、自然科学の分野の解説、美術に対する知識を増やすことを目的とした様々な読み物、ショート・ストーリーなどがその内容であった。

さらには、“Atalanta Scholarship & Reading Union”と名付けられた文学案内と、そこに登場する19世紀の著名な作家に関して、年間を通して優秀なエッセイを書いた会員には奨学金を授けるという企画のページも掲載されていた。その他には、この時代を象徴するチャリティー活動に関する記事、少女たちのための就職（社会進出）へのガイダンス（1年目）や、様々なテーマに沿った作品を募集し、その中の優秀作品には、本や賞金を与えるという“Our Prize Competition”など、多岐にわたる内容から成っていた。

この章では、その中から特徴的な2つの企画、「スカラーシップ・コンペティション」と「ブラウン・アウルとレター・バッグ」を取り上げる。

第1節 スカラーシップ・コンペティション

(ATALANTA SCHOLARSHIP & READING UNION)

“Atalanta Scholarship & Reading Union”という制度は、『アタランタ』の特徴的な試みの1つである。これは、各号のリーディング・ユニオンのページで出されるテーマに関して読者からエッセイを募集するものであった。そして年間を通じて優秀なエッセイを書いた者は、最終の奨学金を得るためのコンペに進むことができた。その最終のコンペで、最も優れたエッセイを書いた者に奨学金を与えるという企画であった。

その応募要領は、各号のページで取り上げられる作家の生き方や考え方、作品に関するテーマについて、指定された語数でエッセイを書き上げて編集部へ提出するというものであった。多くの場合、500語という語数が設定されていた。この語数で、与えられたテーマに沿ってまとめるのはなかなか容易ではない。文章力が試されると言ってもよい。「大切なのは、中身であって量ではありません」(Oct. 1887)という但し書きから、内容がかなり重視されていたことがうかがえる。会員たちには、課題図書に対する読解力や与えられたテーマに対する端的な表現力が要求される。“Privileged Subscriber”には、提出されたエッセイを編集部で添削したものが送り返される。そして毎号、2ヶ月遅れで、エッセイの優秀者は、雑誌の“The Honour List”の欄に名前が載せられるという仕組みであった。

ではここで、6年分の“Atalanta Scholarship & Reading Union”で取り上げられた内容を簡単にまとめてみよう。創刊号 (Oct. 1887) から、3年目の最終号 (Sep. 1890) までは、“English Men and Women of Letters of the 19th Century.”として、ウォルター・スコットから、ブルワーリットンまで、19世紀に活躍した英米文学者⁶が1回に1人ずつ取り上げられ、紹介されている。4年目には、5人の担当者がシェイクスピアに的を絞り、10月号でIntroductoryを、11月号で

6 英国の作家だけではなく、アメリカの作家、ホーソン (Nathaniel Hawthorne) も取り上げられている (June 1889)。

Early Comedy を取り上げ、最後の Sep. 1891 の Romantic Comedy まで12回に分けて執筆している。5年目には、John Kirkpatrick のみが執筆を担当し、文学を離れて、The Victorian Era (First Half; 1837-65) というテーマで、12回にわたってこの時期のイギリス内外の政策や社会情勢について解説を加えている。

6年目には、“Atalanta Scholarship & Reading Union” は “Atalanta Scholarship, Reading Union and School of Fiction.” と名称を変え、12回にわたってフィクションの様式から、編集者の立場からのアドバイスまでを載せている。この年度のテーマ・エッセイには、500語以内で、「歴史的出来事を記述しなさい（マコーレーの文体を踏襲して）」(Oct. 1892) や、「幽霊話の概略を書きなさい。4部仕立てで、それぞれ4章を組み立てなさい。章から章への話の流れを追いなさい」(June 1893) といった趣向を凝らしたテーマが設定してあった。これらのテーマから理解できるように、単に文学に対する素養にとどまらず、母国イギリスの歴史や政治、フィクションを作るもとなる想像力、表現力など多岐にわたる知識や能力を身につけさせようとしたことが看取される。

1年目から5年目までの各作家についてのエッセイを書く際のテーマの特徴は、テーマに関する内容が本文に丁寧に説明してあり、課題図書を参考にして書きやすいもの⁷ もあれば、テーマに関する説明が少なく、読者が課題図書を読み、書かなくてはいけないもの⁸、などさまざまである。つまり、テーマに関しては、必ずしも統一された形があるとは言えず、担当執筆者に一任されていることがうかがえる。しかし、どのテーマも、かなり高度な読解力と表現力を要求し、容易にまとめて、記述できる類のものではない。

執筆担当者には、アンドリュー・ラング (Andrew Lang)⁹ や、『虚栄の市』を書いたサッカーを叔父に持つミス・サッカーなど、著名人の名前が散見される。このように、ある1人の作家についての案内と、エッセイのテーマが毎号掲載された。そして1年後には、奨学金の最終コンペにエントリーする資格のある少女たちが選ばれたのである。

最終のコンペである Scholarship Competition は、年に1回行われる。その年度1年間を通じて5回以上 The Honour List に載った者のみが、このコンペティションに参加することが許可される。雑誌『アタランタ』の創刊の1887年から1893年まで6年分の最終コンペの特徴を見てみよう。

i) エントリー資格

6年間を通じて、年間5回以上 The Honour List に載った者で、25歳以下という条件である。

7 たとえば、1888年3月号ディケンズ、1888年9月号のブラウニング夫人の QUESTIONS。

8 たとえば1887年10月号ウォルター・スコットの QUESTIONS のⅡ。

9 ラング (1844-1912) は、イギリスの古典学者であり詩人、民族学者でもあった。スコットランドで生まれ、ホメロスの「イーリアス」や「オデュッセイア」の英訳や、古代フランスの詩の研究や神話・伝説・民話の研究をした人物としても知られている。オリジナルの童話なども書き、大小合わせると160以上の作品を残した人物でもある。

ii) 賞金

最初の2年間は、次の通りである。¹⁰

1 席, A scholarship of the value of £30 per annum, tenable for three years.

2 席, A prize of £15.

3 席, Books to the value of £5

3年目から、下記のように金額が変化する。¹¹

1 席, A scholarship of the value of £20 per annum, tenable for two years.

2 席, A scholarship of the value of £10 per annum, tenable for two years.

しかし3年目からは、これに加えて、毎月 The Honour List の中でも特に優秀なエッセイを書いた者1名に1ギニーの賞金、次席に半ギニーの賞金と、2名に賞金が出るようになったこと、その作文は、『アタランタ』に掲載されるようになったという変更があった。これによって、優秀なエッセイを書くことで、毎月誰でも賞金を手に入れ、雑誌にエッセイが掲載されるという榮譽を手に入れる可能性が出てきたのである。

iii) 審査員

各年度の審査員については次のようになっている。

1年目; T. H. Stokoe 牧師, 神学博士, キングスカレッジ校長,
グレイズイン・ソサエティ名誉牧師。

2年目~4年目; A. J. Church, 文学修士, ロンドン, ユニバーシティカレッジ,
ラテン語教授退官。

5年目; John Kirkpatrick, 法学博士, エジンバラ大学, 歴史学教授。

前章で指摘したが、大学が女性に門戸を開いたとはいえ、まだまだ少数にとどまっていた。審査員の肩書から分かるとおり、著名な大学教授に専門家の視点から自分の書いたエッセイのアドバイスをもらうことは、大学で学ぶこと同様に非常に有意義なことであったことは容易に想像できる。さらに、チャーチやカークパトリックは、この雑誌に多く寄稿し読者の教養を高め、意見を形成することにも貢献している。

では、1例として、第1回目の奨学金の最終コンペについて見てみよう。エントリーする資格のある少女たちの名前は、1888年11月号と12月号に掲載され、合計で133人いた。ストコウによる出題テーマは、「下記のベーコンのエッセイを基にして、1年間に取り上げられた作家の推薦図書に関して2000語以内で述べよ」というもので、「1888年12月1日必着」という条件がついていた。

“Studies serve for delight, for ornament, and for ability.” (Bacon’s Essays, L. Of Studies.)

Apply this to the books recommended for reading during the past year.

10 第1回については1888年1月号に掲載。

11 第3回については1889年11月号に掲載。

この奨学金コンペに参加資格のある133人のうち、実際このコンペに参加した人数は『アタランタ』に記されていないが、おそらく、かなりの数に上ったであろうことは想像に難くない。

この奨学金の獲得者は、1889年2月号に発表されている。それは、Florence M. Wilson という23歳の女性であった。彼女のエッセイは、1889年3月号に掲載されるという栄誉を与えられ、第2席、第3席の少女と共にそのポートレートも載せられている。彼女は、第1回のスコットが取り上げられた“*Atalanta Scholarship & Reading Union*”のThe Honour Listには名前が見当たらないが、残りの11回すべてのリストにその名前が載せられている。毎回執筆担当者が書いた記事を参考に、当該作家の推薦図書を読み、テーマ・エッセイを書きあげることは大変な作業である。この時代には、ウイルソンのような女性は稀ではなく多くの女性たちが教養を高めようと努力していたことが、エントリー資格のある133人という数の多さに表れている。

応募者すべてのエッセイを読んだストコウ教授の論評には、応募者たちへの的確なアドバイスがあり、この雑誌が、“*Atalanta Scholarship & Reading Union*”を通して、会員のエッセイを書く力を伸ばそうとしていたことが看取される。その全体的な論評は、奨学金獲得者の発表と同じ1889年2月号に掲載されている。そこで教授は、次のような指摘を行っている。

1. エッセイの多くは説得力があり、1年間に読むように推薦された書物に対する十分な知識があり、正しく理解されている。
2. エッセイの中には、正確でないものや、気取った文体が欠点となったものもあったが、主だったミスはエッセイを組み立てる体系の欠如である。
3. 与えられたテーマ（ベーコンのエッセイからの一節）を軽視する傾向があり、単にそれぞれの作家についての簡潔な論評にとどまり、テーマについての言及は、まったく無いか、あってもほんの少しという状態であった。
4. 最優秀エッセイは、すべての点で申し分ないものである。思慮深く、鋭敏な文章で、表現スタイルも明確で、素晴らしい出来栄であった。
5. 2席に選ばれたエッセイも、同様に、いくつかの点では賞賛に値するが、記述が広範囲にわたり散漫である、という欠点が見られる。
6. あとの3作は、書物を聡明に研究したことが伝わってきた。

これらの指摘から、会員たちは、エッセイを書く際のコツや犯しやすいミスを学ぶことができる。その上、最優秀エッセイを読むことによって、会員たちは、教授が指摘した（上記4番参照）「思慮深く、鋭敏な文章」とは何か、「表現スタイルが明確である」とはどういうことかを学ぶことができる仕組みになっている。

さらに、第1回の最終コンペの結果発表（1889年2月号）より前の1888年12月号には、次に開催される第2回“*Atalanta Scholarship & Reading Union*”（1888.10～1889.9）の最終コンペの案内が記載されている。これから約1年後、第2回目の奨学金を受けたいと思う会員にとっては、第1回の最終コンペの論評にある、ストコウ教授からの全体的なアドバイスは、有益なものであったろう。その上、奨学金獲得者ウイルソンが、コンペのテーマ（ベーコンのエッセイからの一節）を、自分のエッセイの中でどのように処理しているかとか、1年間に取り上げられた

作家についてどう的確にまとめているか、独自の意見はどのようなか、などを検討することは、自分でエッセイを書くこと同様、表現力をみがく効果的な教育手段になったに違いない。

この時代の女性について、オールティックは著書の中で、次のように述べ、社会進出とか自立というようなことから対極にある存在となるべく女性達に足かせがはめられていたことを指摘する。

どうしても頭を使おうとする意志の強い女性には不愉快で、男を警戒させるところがあったのだ。従って上流、上層中産階級の少女たちが住みこみの女家庭教師（ガヴァネス）や通いの語学、音楽教師から受ける教育は知的内容を欠いており、ましてや知的刺激などは望むべくもなかった。……少女たちは「男の下の働き蜂か玩具、さもなくば男の頭上にいる天使のようなものとなるべく」教育されていたのだ。¹²

ガヴァネス自身も、女余り現象の影響でやむなく家庭教師として働く女性が多く、質の高い書物を読み、自分の意見を表現する教育は受けていないことが多かった。そのような時代背景の中で、このスカラシップ制度は、読者に独学の態度を身につけさせ、教養を高め、奨学金を手にする可能性を開いた画期的な企画であるといえる。

第2節 ブラウン・アウルとレター・バッグ

『アタランタ』の3年目、1889年10月号に新しい企画「ブラウン・アウル」(The Brown Owl)が登場した。この企画は、読者の日常生活に関係のあるテーマを1つ取り上げ、担当者が意見を述べるコーナーや編集者ミードが本について書いたコーナー (Notes on Books)、そして編集室に宛てられた手紙から彼女が読者に紹介したいと判断した手紙¹³を取り上げるコーナーを設けている。

「レター・バッグ」(The Atalanta Letter-Bag) は、ブラウン・アウルより2か月遅れの1889年12月号から掲載されるようになった。このコーナーは、その名前から理解できる通り、『アタランタ』の記事やブラウン・アウルで載せられた意見への反響、また「教会からの慈善活動の要請」(Jan. 1892) や 'Education of Girls in Russia' (Sep. 1892) など、多彩な手紙を紹介するコーナーである。

これまで『アタランタ』では、読者は雑誌を読むだけの受け身の立場に置かれていて、編集室発信の一方通行が慣例であった。しかし、このお便りコーナーでは読者の生の声が拾い上げられている。それによって、19世紀に生活していた女性読者の心の内をうかがうことができるのである。このレター・バッグが、ブラウン・アウルに呼応するかのようになり始めたことから、やはりこのブラウン・アウルの意見を読んだ読者の反響が多く載せられている。以下に、ブラウン・アウルのテーマと担当者の一覧を挙げた。テーマの選び方とその内容によって、2か月後のレター・バッグに寄せられる読者からの反響にも大きな差ができることが、特徴として挙げられる。

12 リチャード・D. オールティック、要田圭治・大嶋浩・田中孝信訳『ヴィクトリア朝の人と思想』(株)音羽書房鶴見書店、1998年、64ページ。

13 第3章、第2節で取り上げる東京の福澤滝からの手紙は、June 1892のブラウン・アウルに掲載されている。

3年目 (Oct. 1889～ Sep.1890)

掲載年月	テーマ	著者名
Oct. 1889	Society	L. B. Walford
Nov. 1889	Occupations	Sarah Tytler
Dec. 1889	Education	Prof. A. J. Church
Jan. 1890	Recitation <i>versus</i> Action	Charlotte M. Mason
Feb. 1890	On Fashion in Manner	Miss Thacheray
Mar. 1890	On the study of Nature	C.Lloyd Morgan
Apr. 1890	The Forgotten Graces	R. K. Douglas
May 1890	"Coming Out"	Mrs. Molesworth
June 1890	Sunday-School Teaching	Eleanor Bairdsmith
July 1890	The Forgotten Graces— II	Prof. Douglas
Aug. 1890	On Teaching to Swim	Eleanor Bairdsmith
Sep. 1890	On Dress Allowances	Graham R. Tomson

4年目 (Oct. 1890～ Sep.1891)

掲載年月	タイトル	著者名
Oct. 1890	The Art of Pleasing	Mrs. Parr
Nov. 1890	Grumbles	L. B. Walford
Dec. 1890	Our Christmas Entertainment	Florence Pike
Jan. 1891	Women in Contemporary Art	J. C. Staples
Feb. 1891	On Housekeeping	Eleanor Bairdsmith
Mar. 1891	A Good time	L. B. Walford
Apr. 1891	A Girl's Library	Prof. A. J. Church
May 1891	Flirtation	Luisa Parr
June 1891	Engagements	Luisa Parr
July 1891	Marriage	Luisa Parr
Aug. 1891	The Amateur Accompanist	M. C. Gillington, A. R. A. M
Sep. 1891	Golf as a Pastime for Girls	Carita Mary Yendys

5年目 (Oct. 1890～ Sep.1891)

掲載年月	タイトル	著者名
Oct. 1891	On Cooking	Mrs. De Sallis
Nov. 1891	On Cooking Part II	Mrs. De Sallis
Dec. 1891	Christmas Books	L. T. Meade
Jan. 1892	On Cycling for Girls	Robert Cochrane
Feb. 1892	Fancy Painting	Elie Smith
Mar. 1892	Fancy Painting Part II .	Elie Smith
Apr. 1892	On Cooking Part III .	Mrs. De Sallis
May 1892	The Virtues of Dress Part I .	L. B. Walford (Mrs.)
June 1892	The Virtues of Dress Part II .	L. B. Walford
July 1892	Amateur Photography	Grace Wyld
Aug. 1892	The Planet Mars	Edith Picton Warlow
Sep. 1892	How to Start a Girls' Debating Society	Eva Anstruther

6年目 (Oct. 1890~ Sep.1891)

掲載年月	タイトル	著者名
Oct. 1892	The Refinement of Dress (From a Girl's Point of View)	Horatia Hardy
Nov. 1892	Window-Box Gardening	Edmund J. Baillie
Dec. 1892	Christmas Books	記載なし, 目次にも。
Jan. 1893	Women's Suffrage	John Kirkpatrick
Feb. 1893	On the Art of Entertaining	Louisa Parr
Mar. 1893	A Letter from Cambridge	記載なし, 目次にも。
Apr. 1893	Our Club "Come over and help us."	Eleanor Bairdsmith
May 1893	Gardening for Girls	H. R. Vernon
June 1893	Sketching from Nature Part I.	Elie Toulmin-Smith
July 1893	Sketching from Nature Part II. Colour.	Elie Toulmin-Smith
Aug. 1893	掲載なし	なし
Sep. 1893	A Family of Misses.	Mrs. Barbauld

この一覧を見ていて気づくことは、年を経るに従って、ブラウン・アウルのテーマが読者から、賛成や反対の出にくいおとなしいものになっているという傾向である。「料理」や「絵画」、「余暇活動としてのゴルフ」、「火星」や「ガーデニング」では、読者から将来の自分の生き方を見据えた活発な意見を期待することはできないのであろう。

それゆえ、ブラウン・アウルのテーマが次第に、趣味や家庭生活を題材とするようになると同時に、レター・バッグも、「新規のアタランタ定期購読者を多く紹介した読者への賞」(May 1893) や A. S. & R. Union の The Honour List (June 1893) というように、ありきたりな記事を載せるようになった¹⁴。このコーナーが発足した当初の、読者の熱い意見を載せることはなく

14 このことは、編集者が、ミード一人になったり、新しい人物が加わったりした事と関係がある可能性がある。6年目の「ブラウン・アウル」のテーマのみならず、『アタランタ』が全体的におとなしい内容になり、活発に意見を述べる読者の姿が見えなくなったのは、2人体制となった編集室の方針なのかもしれない。ちなみに、翌年の7年目には、ミードは編集者を辞している。

下に、1年目から6年目までの編集者と出版社のリストとその年度の特徴をあげてみる。

年度	編集者	出版社とその住所
1年目 (Oct.1887~Sep. 1888)	L. T. Meade Alicia A. Leith	Hatchards' Piccadilly
(特徴) 『アタランタ』の創刊。前身 <i>Every Girl's Magazine</i> の編集者 Alicia A. Leith に、L. T. Meade が加わる。		
2年目 (Oct.1888~Sep. 1889)	L. T. Meade John C. Staples	Hatchards' Piccadilly
(特徴) Atalanta Fine Art Scholarships & Prizes として月ごとに、人物画と風景画のお題が出る。(絵画に造詣の深い編集者 John C. Staples の影響か?)		
3年目 (Oct.1889~Sep. 1890)	L. T. Meade John C. Staples	Trischler & Co. 18 New Bridge Street E. C.
(特徴) 出版社の変更、Atalanta Fine Art Scholarships & Prizes の取りやめ、The Brown Owl や Letter-Bag の開始。		
4年目 (Oct.1890~Sep. 1891)	L. T. Meade	Trischler & Co. 18 New Bridge Street E. C.
(特徴) 編集者が、L. T. Meade 一人になった。		
5年目 (Oct.1891~Sep. 1892)	L. T. Meade	"ATALANTA" Office 5A, Paternoster Row.
(特徴) 出版社が「アタランタ・オフィス」となり、移転。		
6年目 (Oct.1892~Sep. 1893)	L. T. Meade A. B. Symington, M. A.	"ATALANTA" Office 5A, Paternoster Row.
(特徴) 編集者に A. B. Symington が加わった。		

なってしまったのである。

3年目の R. K. Douglas の The Forgotten Graces (Apr. 1890) や、前節で取り上げた “Scholarship Competition” の審査員を何年にもわたって務めた Prof. A. J. Church による Education (Dec. 1889) 並びに、4年目の A Girl’s Library (Apr. 1891) などに対しては、レター・バッグの中に読者からの活発な意見が多く載せられ、当時の女性たちの生き生きとした主張があふれている。

1例として、Education がテーマに取り上げられた時のことを挙げてみよう。ラテン語やギリシャ語などの古典教育を支えてきた大学教授のチャーチは、イギリスが、産業革命を経て様々な技術革新が進み、科学を重視する機運が盛り上がってきたことに対して、危機感を抱いた。科学主義が進むと、人間性の欠如した人間が増加するのではないかと危惧するのである。実生活との結びつきが希薄な古典教育が男性の領域から衰退するのはしかたがないとしても、女性には古典を中心に学んで欲しいと唱える。

これに対し、多くの読者からの反響が寄せられ、紙面をにぎわしている。どの手紙にも、確固とした主張や、先人の研究について言及した明晰な意見がみられ、多くの読者たちが科学とヒューマニティは共存可能であると考え、科学一辺倒でも文学至上主義でもない柔軟な考え方をしている局面がうかがえる。これらの手紙全体から透けて見える女性の姿は、守られるべき、傷つきやすい女性ではない。意志を持ち、誇り高く能動的な人生を送って行きたいと考える姿である。

ブラウン・アウルで展開された1つの論が触媒となって、読者の心の中に無意識のうちに形成されていた自分なりの意見と、女性であるという自覚が結びついた時、チャーチ教授の論と持論との差異に目が向けられたのである。おそらくは、テーマに取り上げられなければ、読者の意識に上ることもなく、手紙を書いて意思表示をしようという行動にならなかったのではないだろうか。それまであいまいにされていたどう生きるべきか、何を学ぶべきかという自分なりの意見に目を向けるきっかけがこの記事であることが看取される。

おそらくミードは、読者が自分の意見を持ち、それを発表する機会としてこのブラウン・アウルとレター・バッグを企画したのではないだろうか。そうだとすれば、論争を巻き起こすような執筆担当者の論をあえて掲載したという可能性もでてくる。人生の様々な出来事に関して中身の濃い議論をすることが、有意義な生活を送る1つのきっかけとなるならば、ミードがこのコーナーで狙ったものはまさしくそれであったと考えられるのである。

第3章 『アタランタ』にみられる日本

雑誌『アタランタ』の中には、日本に関する記事がいくつか確認できる。当時のイギリスは、鎖国を解き近代化を推し進めようとしていた日本に大きな関心を寄せていたことが見て取れる。そこで、この章では『アタランタ』の記事にみられる日本を取り上げる。英国人女性と日本人女性との触れ合いを描いた2作品と、『アタランタ』に掲載された日本人の手紙から、当時の日本の様子や女子教育に関する考え方を探りたい。

第1節 『アタランタ』に掲載された2作品

O-WUTA-SAN. と *My Japanese Handmaiden*i) 『オウタサン』(*O-WUTA-SAN.*)

『オウタサン』は、1890年6月号から7月号にかけて掲載された作品で、この著者はサラ・ジャネット・ダンカンである。この物語の主人公は在日イギリス人女性で、彼女の目から見た日本女性の様子と印象が、ユーモアと繊細さをもって描写されている。

ここに描かれているのは、礼儀作法や生け花、芸事、詩歌などの日本文化の素養がある「歌」¹⁵という名の富裕層に属する若い未婚の日本女性である。彼女の兄はマツオという名で、英国留学を終えて帰国したばかりの人物である。本文で彼は、「日本人の生活環境を、発展という近代的な考え方に沿って組織するのに熱心な若い紳士階級の一人」¹⁶と表現されていることから分かるように、日本の近代化を望んで活動している。彼は、近代化のためには欧米を見習う必要があると考えている。主人公に妹を紹介する時、兄のマツオは「土着の洗練されていない女性」と証言している点からみて、妹が修めてきた日本文化の素養には重きを置いていないことがわかる。当時の日本は、欧米に比べて、経済的、技術的に劣っていると考えられていた。そのことが、文化的に劣っているという考え方につながり、英語を話せない事やナイフ・フォークを使えない事が、マツオの「妹は進歩的でない」という断定的口調になって表れている。

その日主人公は、菊まつりという極めて日本的な文化の中に身を置いていた。そこには、すべてがミニチュアで、芸術的で非現実的な雰囲気があふれていた。その場所に、素晴らしい着物を着て、白やピンクで化粧し、飾りたてた歌が現れた。主人公は、この日本女性が何度も何度も日本のお辞儀をすることに対して「新たな発見」「感動」を覚える。そしてすべてが一体となった日本の美を感じ取るのである。また主人公は、この時の歌のことを「私のリアルな夢の極み」(p. 574)と表現し、「私はどうしようもないほどオウタサンが好きになった」(p. 575)と記している。

その後主人公は、歌が父親の意向により、翌週から徹底した外国の教育を受ける予定になっていることを耳にする。そして彼女は、漠然とではあるが、それが歌の人生にどのような変化をもたらすかについて不安を抱く。しかもその話は、歌自身が語るものではなく、兄をして主人公に語らせるものである。そこには、歌の意志は全く認められない。おそらく兄の進言もあったかもしれないが、外国の教育を受けさせることを決定したのは父親である。それまで培ってきた日本の文化的素養をあっさり捨てて、英会話やピアノ、洋服の着方などの教育を受けることに、歌自身は何の異も唱えなかったのだろうか。この後の歌の生活の様子からわかるとおり、彼女は家長の命じた通りの生き方を従容として受け入れ、懸命に努力をする。

彼女の生活態度は、あたかもこれまでずっと和服を着て、日本髪を結び、日本的な風景をバックに置かれていたマネキン人形が、客にさらにアピールするようにと、1日で洋風の衣装

15 引用はすべて以下のテキストに従い、本文引用末尾にページ数を記載する。*Atalanta* June 1890. 以降、訳はすべて加塩訳。ちなみにp. 576で、自分の名前である「ウタ」は「歌」(song)を表すのだと明らかにしている。16 p. 574.

や髪型に変えられ、外国的な風景をバックに置かれているのと同じである。歌は、良くできたマネキン人形のような存在で、人々に可愛がられ、大事にされている。

主人公は、歌が赤ん坊の時から諦めと満足の雰囲気の中で育ってきていることを知る。この日本女性は、自己主張することなく、甘やかされ、子守りの背中であだめられて成長してきた。主人公は、歌の人生について次のように述べている。

たぶんこの結果彼女は、めったに声を上げて叫ぶことはなく、微笑みながら、人生の不運に耐えるのも悪くないという考え方を次第に受け入れるようになる。その考え方は日本では、標準的な考え方である。(p. 576)

その後主人公は、グランド・ピアノを前に痛ましいほど熱心に練習をする歌と再会する。彼女のいでたちは、西洋風の化粧と髪型をし、洋装であった。歌は、英会話の力が上達し、主人公に、ダンスを習い、テーブル・マナーも学んでいると英語で説明する。兄のマツオは、初めて妹を紹介してくれた時より、はるかにずっと妹を誇りに思っている。これに対して主人公は、歌の洋服について、「ちっとも似合っていない」とし、彼女が作ったペーパー・フラワーのバラの花束に「ひどく醜い」という印象を持つ (p. 604参照)。

初めて会った時の和服を着ていた歌の歩き方を、主人公は「ちょこちょこ歩き」と表現する。堂々と大股で歩く洋服姿の欧米人とは異なり、和服を着た日本女性は、膝から上をあまり動かさないうで歩く。この歩き方が主人公の言う「ちょこちょこ歩き」という表現になったのであろう。ピアノから離れた歌は、「あいかわらずちょこちょこ歩きをしていた」(p. 604)と主人公は表現している。外見はすべて西洋風になったとしても、マネキン人形とは異なり、内面はすぐに変えられるものではない。動作やしぐさと外見のアンバランスに、主人公は、「似合わない」という印象を受けたに違いない。

この話の中で、主人公は、ピエール・ロチ (Pierre Loti; 1850 - 1923) について言及している。フランス人のロチも同時期に日本を訪れ、様々な出来事を手記に残している。日本を訪れた急激な近代化という名の欧米化を、鹿鳴館で催されたヨーロッパ式舞踏会を引き合いに出して、次のように述べている。

命令は上からやってきた。天皇の布告は、宮廷の夫人たちに、ヨーロッパの姉妹たちと同じ服装をすることを命じた。人々は熱に浮かされたように生地を、型を、仕立て屋を、できあいの帽子をとり寄せた。(中略) 古い儀式や千年来のしきたりの中に因習化したように見えたこの世界が、その神秘的な不易性を一日でかなぐり捨てたのである。¹⁷

ロチは、しばらくの間ではあったが、長崎で菊という女性と結婚し、日本女性について間近で観察してきた人物である。彼は、長い伝統のある自国の文化をあっさりとして捨て、西洋風に変える日本を理解できない。そして、西洋化を推し進める風潮に対して懐疑的になり、「我々を

17 船岡末利編訳 『ロチのニッポン日記——お菊さんとの奇妙な生活』有隣堂、1979年、177- ページ。

煙に巻く芝居のあと、彼女たちはきっと、ヨーロッパ風の新御殿を見捨てて伝統的な日本家屋に行き畳の上でうづくまるのであろう。そして自分自身を取り戻す。——そこらあたりのことは、我々にはもうなんにも分からない¹⁸と述べ、東洋から西洋へと何の執着もなく移行する日本は、必要ならば、また西洋文化にとどまることはなく、東洋文化に戻ってしまうのではないかと考えている。

歌は、封建的な家父長制度における理想的な日本女性の美德、すなわち、従順でなくてはいけなとか、両親には素直でなくてはいけなとか、兄には礼儀正しくあるべきなどの儒教的な教えの枠の中にとどまり続け、自己を確立することや、自我を主張することなど夢にも考えていない。これに対し西洋文化の根本には、個人の尊重がある。自己を確立できない彼女の態度とは相容れない西洋の文化を身にまとい、学んだとしても、彼女の内と外にアンバランスが生じるのは否めない。

主人公は、オウタサンもマツオサン同様に近代的な考えに適応してしまったのだ、と書き、自分は、この「近代化」を嫌い、あの菊まつりの古風で小柄な着物姿を懐かしく思い出す、と述べている (p. 604参照)。主人公は、書き出しの所で「リアルな夢の極み (climax)」と言う言葉を使ったが、この「極み」の後には降下しかないと見越していたのだ。日本文化の「極み」であった歌にとって、英語や西洋文化を学ぶことは所詮、本質を無視した模倣でしかなく、「極み」を超えることは不可能であった。

ii) 『私の日本人小間使い』 (*My Japanese Handmaiden*)

この『私の日本人小間使い』は、1892年1月号に掲載された。著者は、ルイス・ロイドである。主人公である在日イギリス人女性と主従関係にある日本人小間使いを描いた作品である。小間使いのカミは、英語を学びたいという熱意のある少女である。

主人公は、当時の一般的な日本人が英語に強い関心を持っていたことを次のように述べている。

私たちの言葉は、日本人には説明のつかない魅力を持っているようで、日本人は、イギリス人同士が話をしていると、常に後ろからくっついてきて、他では受けることのできない英語レッスンを受けるのだと聞いたことを思い出した。¹⁹

その一人であったカミは、主人公の家に6番目の使用人として雇われることになる。彼女は英語を「アメリカ」と呼び、それを学ぶことに熱心である。主人公は、この熱心さを理解し、アングロ・サクソンの女性が、外国に行って外国語を学ぶ際の行動の手本となるだろうとまで述べている。

『オウタサン』で描かれた女性、歌は裕福な家庭環境にいるが、自分の意志を持たず、言われるままに行動し、英会話やマナーや服装など、洗練された欧米の文化を取り入れた女性、す

18 船岡：179-80ページ 参照。

19 *Atalanta* Jan.1892; p. 200.

なわち父親や兄が望む通りの女性になるべく努力していた。一方、ここで描かれるカミは、階級としてははるかに低い労働者ではあるものの、自分の意志を持ち、英語を学ぶために外国人の家庭に使用人として入りたいと思う。そのために自ら手はずを整えるといった行動力にあふれる女性として描かれている。歌よりは、はるかに上昇志向が強く、主人公も「特徴的な強情さ」(p. 202)と述べるほどの強い意志を持っている²⁰。ただ、その「度を越えたほどの英語熱」(acute form of Anglomania; p. 201)から、使用人としての立場を忘れ、雇い主を困惑させることもある。しかしなぜ、そのようなカミを解雇しなかったかについて、雇い主である主人公は、「彼女の目の中に神が微笑みかけ、その微笑みがそのまま留まっている。彼女は、大公妃のような威厳と子供のようなかわいらしさを持ち合わせている」(p. 201)と述べ、彼女の中に存在する神秘性や神道という宗教に根差したつつましい生き方から感銘を受けている。また、「私たち (we) は彼女の魅力に大変ひきつけられていた」(p. 200)と述べた場面からは、カミという人物に、主人公のみならず周りの人たちも魅力を感じていたことが理解される。さらには、彼女の動きの美しさや行動の中から読み取れる彼女の生き方に対して、次のように尊敬に似た感情さえ抱いている。

彼女の奉仕の中にあるのは、終わらせるべき義務ではなく、行われるべき儀式である。どのようにして人生を楽しんでいるのかはわからないが、一度だけ彼女が、人力車の車夫にとっても丁寧なお辞儀をしているのを見て驚いたことがある。(p. 201)

キリスト教と本質的に異なり、すべてのものに神が宿ると考える神道の影響で、カミの動作の一つ一つが、主人公にとっては新鮮で、意味深いものとして映る。彼女は、主人公のところに毎夕、英語のレッスンを受けにやってくる。主人公は、このレッスンにより、カミの真摯でつつましい熱意を通して、日本特有の神道について学ぶこととなる。教えてくれたことに対して、丁寧にお礼を述べ、大事そうに新聞紙の余白を破り取ったものに書き込む。その動作が、主人公の心に強い印象を残す。

歌は、英会話を習う傍ら、辞書と文法書の手助けを借りながら、ウォルター・スコットを読んでいると語っている。これに対し、カミは体系的な学問としての英語には全く興味がない。また、アルファベットを覚えることはいっさいしない。ただ耳から聞いた言葉を、そのまま墨筆を使い日本のかな文字で、縦書きに書き写していく。この2人の女性の英語の学び方の違いは、日本の階級差を反映しているものの、最後に主人公に与えた印象に関しては、その両者間に雲泥の差がある。

この作品の書き出しの所で、主人公は、日本に対して、特徴的な表現を使用している。それは、「文化の発達した国からごく最近到着したばかり」(I had arrived too recently from civilized countries; p. 200)という言葉や、日本を指して「すべてが遅れている国」(a country where everything was done backwards; p. 200)という表現である。日本は、欧米諸国に比べて社会的、

20 毎日2度は風呂に入ると描写される歌は、富裕層の人間であり、上流階級に属している可能性があるのに対し、カミは労働者階級に属している。もし、カミがその貪欲なほどの知識欲や上昇志向で努力し、もっと知的な職業に就いたならば、下層中流階級に社会階層を上ることもありうる。

文化的に遅れた国であると考えていることが分かる。

しかしその後、このような主人公の認識に変化が生じたことが読み取れる場面がある。それは、イギリスへの帰国の途に就く主人公の心情が語られる場面である。イギリスへ帰る主人公を喜ばせようと内緒でカミは、荷造りをする。長靴は帽子箱に入っていて、帽子はショールの革紐入れに、イブニング・ドレスは骨董品棚の一番下に、といった具合に、まったくちぐはぐな詰め方である。このことはやはり、歌の階級とは異なり、カミは文化的に遅れた日本人という印象を与える。しかしそれにもかかわらず、主人公は、その優しさや礼儀正しさに強く印象付けられる。そして、その強い気持ちから、ごたませの荷物を詰めなおすことができないままに、東京から横浜まで旅をするのである。歌と主人公の間には交わされなかった心の交流が、カミとこの主人公の間にみられたことが、この場面から読み取れる。カミと離れていくことが、「とても貴重な珍しい品物を手放すような感じがした」と表現していることや、「カミのことを神秘的である、と感じたことを後悔しなかった」と述べていることは、作品の最初に描かれた日本の印象とは対照的である。主人公の心の中にカミや日本という国に対して、感謝や尊敬の気持ちが生じたことが読み取れる。

最後に、カミの中に神秘性を見出したことに後悔はしなかったという、この作品における主人公の印象は、日本そのものへの印象に他ならない。この印象は、歌のけなげな変容ぶりが、日本の急速な欧米化を象徴し、その本質を無視したうわべの模倣が、主人公にやるせなさを感じさせたのとは対照的であると言わねばならない。

これまで第3章で取り上げてきた2作品はどちらも、英国人作家が日本人との交流を、英国人の視点から描いた作品であった。2人の日本人女性は、実在の人物であるとは言い切れず、作家自身による日本での体験を基づく虚構であるという可能性もあると思われる。

これに対し次節では、実在の日本人女性を取り上げる。彼女が実際『アタランタ』に投書し、掲載された手紙について検証する。そこからは、英国人の目のフィルターを通さない、ありのままで生き生きとした日本のアタランタ像が浮かび上がってくる。

第2節 日本のアタランタとしての福澤滝

この節では、「ブラウン・アウル」に取り上げられた日本人女性の投書をもとに検証を加え、当時の日本人アタランタ²¹の人物像を探る。1892年6月号の「ブラウン・アウル」で編集者のミードは、「ベルギーでの女性の生活」(A Girl-life in Belgium)と並んで、東京に住む女性タキ・フクザワ(Taki Fukuzawa)の投書を取り上げ、「日本の独身女性の生活」(Japanese Girl-life)を紹介している²²。この文章は、正確で流暢な英語で書かれていて、編集者のミードは原文をそのまま載せていると記し、次のようにその投書を紹介している。

21 初めに見てきたとおり、この雑誌『アタランタ』は、若き女狩人のごとき「アタランタ」(読者たち)に大きな期待を寄せる構成となっている。それゆえ日本において、『アタランタ』を読み、投書を寄せたこの女性は、日本の「アタランタ」であると言える。

22 *Atalanta*, June 1892, p. 560.

東京から、日本での独身女性の生活についての手紙を受け取りました。その内容の正確さは保証いたします。筆者は若い日本人女性で、文面は原文のままです。

そして、タキによる「日本の独身女性の生活」の説明が始まる。書かれた日付は、*July 20, 1891.*とあり、掲載される1年近く前に書かれたものであることが分かる。そこにはまず、未婚の日本女性の生活は過渡期にあり、閉ざされた生活から自由を満喫できる生活へと変化しつつあることが述べられている。それゆえ、女性の生活には一律の基準が存在しない事や、教育についても基準が無く、「寄宿学校に通う人もいれば、個人で雇ったプライベート・ティーチャーに教育を受ける人もいる」と、それぞれの家庭状況に応じたやり方で教育を受けていることが述べられている。その後の説明は、当時の女子教育に対する一般的な考え方を反映していて興味深い。

しかし、どちらの教育を受ける人も、英会話を習います。寄宿学校生を除いては、授業の大半を音楽と裁縫が占めます。(p. 560)

約20年前までは、女子教育はとても軽んじられていました。女性にとって教育は全く無駄なものとしていたのです。それゆえ教育は、女性の人生の中で大きく変化したものの一つです。(p. 560)

その後、教育を修了した女性は、どのような生活を送るかとか、どのようにして結婚相手を見つけるのかなどが書かれている。ヨーロッパの女性と異なり、日本では未婚の男女が知り合う機会が少ないので、娘が適齢期に達したと判断した親が、自分の知り合いの中から娘にふさわしい相手を選ぶことや、もし娘が相手を気に入らなかつたら、両親には結婚を命令したり、説得したりする力はないと述べる。次の求婚者を探し出し、前と同様に娘に尋ねる。そして、娘が同意する人物に巡り合うまでその手順が続けられると書き、それは娘自身が結婚相手を選ぶのと同じであり、ただ、親が娘にふさわしいと思う人物に限定し、娘がその中から選ぶというプロセスをたどると説明する。このことは、タキ自身やタキの親の人生観や物事に対する考え方を象徴している点において興味深い。

彼女は、締めくくりの言葉として、若者より年配の間人はいろいろな経験があり、物事に対する理解力も優れていることを指摘し、日本人女性の中でこの結婚相手の選び方に不満を持っている者はいないと記している。このタキの描く日本人女性の生活に関しミードは、親の意見を信頼し尊重する日本人女性の考え方に理解を示し、イギリスの読者の中にも参考にして、みならうべき人もいるだろうと述べている。

この投書を『アタランタ』に送ったタキ・フクザワは、1876年に福澤諭吉の4女として生まれた福澤滝である。『アタランタ』への投書については、当時の「時事新報」という日刊紙の記事に「日本女子の生活」として、掲載されているので、その記事を確認してみたい。記事の前書きには、次のように記されている。

左の一編は^{ロンドン}倫敦発行アタランタ雑誌中の一節を翻訳したるものなり此一節は福澤先生の令嬢たき子が英語作文の課業に^{したた}認めたるを教師の手により本国へ送りしものと見え右の雑誌に掲載せられたり末文雑誌記者の論評に日本女子に^{しんじ}心事の順良なる英女子をして之を学ばしめ利益ある可しとの一語は我教育社会に於て特に注意す可き所のものなり²³

このことから、滝は英作文の授業の一環としてこの手紙を書いたことがわかる。本国とあることから、教師はイギリス人であること、我が国の女子教育にあっては順良な心を持つことが大切であり、イギリス人の編集者もその点を賞賛していることなどが読み取れる。「時事新報」は、父論吉が創刊した日刊紙である。このことは、次のように自伝の中に書かれている。

……「時事新報」という新聞紙を始めました。(中略) 全国中にいささか独立の生計をなして、多少の文章思想もありながら、自分自身は政治上にも商売上にも野心がなくて、あたかも世間の外に超然としている者は、おこがましくも自分の他に適當の人物が少なからう、と心の中に自問自答して、ついに決心して新事業に着手したものが、すなわち時事新報です。²⁴

この日刊紙は、福澤論吉の言葉どおり、中立な立場で政治を論じる新聞であり、当時高い評価を受けていた。滝は、『アタランタ』に掲載されたこの手紙を書いた時は、15歳ほどであった。その3年後の1894年に結婚し、姓を「志立」と改めている。ここに書かれた内容から彼女は、気が強くて才気にあふれ、英語が堪能な富裕層の若い女性であるという印象を受ける。自身のもとへ、父論吉が結婚候補者の話を持ってきたのであろうか。その中で、自分が気に入った人物以外は結婚相手として考えない。その彼女の姿は、多くの結婚希望者の中、自分より足の速い男性と結婚すると公言したギリシャ神話の美しく足の速い女狩人アタランテの姿をほうふつとさせる。

いったい滝はどのような女性であったのだろうか。福澤研究センター通信には、次のように滝の人となり が描かれ、それによれば彼女は、行動力があり、力強く人生を歩む女性としての人生が看取される。

志立は、阪急東宝グループの創始者小林一三によれば、「小肥りで、血色のよい澁刺たる洋装の女性」で、明治20～30年代の慶応義塾の学生にとって憧れの的であった。(中略) 晩年には、徳川無声や丸山真男と対談し父について語っている。昭和45年3月5日に亡くなった。²⁵

23 明治25年(1892年)7月14日、第3394号。

24 福澤論吉、斎藤孝編訳『現代語訳 福翁自伝』(ちくま新書912)、筑摩書房、2012年、241-42ページ。ちなみに論吉は、実力者であり、裕福ではあったが、このように労働報酬により生活の糧を得ていたことにより、定義上は中流階級に属する。中層中流階級、あるいはその上の、上層中流階級に属していると考えられる。

25 「福澤研究センター通信」(第16号)、2012年3月31日発行版。

滝の父親であり教育者でもあった論吉は、自著の中で子育てについて次のように述べている。父の、この考え方が、滝の人生や考え方に大きく影響を与えていたことは疑問の余地がない。

私に九人の子供があるが、その九人の中のどれを可愛がってどれを可愛がらないということは本当にちよいともない。四男五女の男の子と女の子と違いのあるわけもない。世間では男子が生まれるとたいそうめでたがり、女の子でも健康であればまずまずめでたいなんて、自然と差別があるようだが、こんな馬鹿げたことはない。女の子だったら何が悪い。私は九人の子がみんな娘だって少しも残念と思わぬ。²⁶

滝の立場は、第1節で登場した歌の立場とまったく対照的である。『オウタサン』の主人公は、日本では、生まれたのが男子であるか女子であるかで周りの大人の対応に大きな違いがあることを指摘している。それは、歌の兄が生まれた時は、親族や友人が大きな鯛を下げてお祝いに駆けつけるが、歌の誕生には鯛はもたらされず、人々の心に愛情や関心を呼びおこしただけであった、という場面である。さらに主人公は、日本では女性は自己抑制を学び、意志表示をしないことが重要であるということを知る。そして、それを無意識の中で理解していく歌の様子を次のように描いているのである。次の引用は、第1節と重複するが、歌と滝の人生を比較する上で、重要であると考えるので、再度引用する。

たぶんこの結果彼女は、めったに声を上げて叫ぶことはなく、微笑みながら、人生の不運に耐えるのも悪くないという考え方を次第に受け入れるようになる。その考え方は、日本では標準的な考え方である。(p.576)

女性でありながら意志をもたない人形のように育てられた歌と、女性でありながら男性と変わることなく育てられた滝の2人の人生は、あたかも19世紀のイギリスの上流階級の若い女性と、次第に力をつけてきた中流階級の若い女性との関係と同様に思えてならない。人形のように、家事を複数の召使に行わせ、嫁ぐ日までは父に従い、結婚後は夫に従う生活であった上流階級の女性と、「女余り現象」の影響を受け、不本意ながらも人生の岐路に立たされ、自立を余儀なくされたことから、力強く社会進出への道を切り開いていった中流階級の女性の姿である。

滝は、手紙の中で述べている通り「今や日本女性の生活は、大きく変化しつつあります。つまり、閉じ込められた生活から、自由が満喫できる生活への変化です。標準というものが存在しない」(p.560)という時代の過渡期にあって、その上進歩的な考え方を持つ父親の教育を受けた。そして彼女は、「新しい女性の生活や生き方について『新女界』などに寄稿し、東京基督教女子青年会の創設に関わり、大正7(1918)年から昭和17(1942)年まで、その会長も務めた」²⁷ 事から分るとおり、女性たちの先頭に立ち、理想に向かって行動する人生を送った。

26 『現代語訳 福翁自伝』、235-36ページ。

27 「福澤研究センター通信」(第16号)、2012年3月31日発行版。

これはまさしく、編集者としてミードが若い女性に求めた理想像と一致する。このような滝の姿は、様々なものが変化する時代にあって、父の薫陶を受け、教養を蓄え、自信を持って力強く進むアタランタの姿に他ならない。

これまで『アタランタ』に見られる日本人の女性3人の姿を見てきた。歌の姿には、イギリスの上流階級の女性のイメージを重ねることができる。同様にカミからは、貪欲なほどの学習意欲と上昇志向を持つ、労働者階級の女性の姿が見えてくる。そして滝には、『アタランタ』の読者層である中流階級の才気煥発な女性のイメージがある。『アタランタ』に取り上げられた3人の日本人女性が、3つの階級を代表しているように感じられるのは偶然の一致であろうか。そして、この時代の牽引力となったのは、歌のような女性ではなく、物事に意欲的に取り組むカミに象徴される労働者階級とつながりの強い下層中流階級や、自信にあふれ実力を備えた滝に象徴される中層・上層中流階級の女性たちであったことをしかと銘記しなくてはならない。

参考資料

Atalanta. vol. 1-1, 1-2, 2-1, 2-2 (Oct.1887- Sep. 1889) Tokyo: Athena Press, 2008.

Loti, Pierre. *Madame Chrysantheme*. The Project Gutenberg eBook Release Date: March 12, 2005 [EBook #15335].

Mitchell, Sally. *The New Girl; Girl's Culture in England, 1880-1915*. New York: Columbia University Press, 1995.

Reynolds, Kimberley. *Girls Only?* Temple University Press, Philadelphia.

川端有子「アタランタ 別冊解説」, アティーナ・プレス, 2009年。

川本静子『ガヴァネス（女家庭教師）ヴィクトリア時代の〈余った女〉たち』
中公新書, 1994年。

木原貴子・依岡道子「ヴィクトリア朝後期における女性の知的職業—雑誌 *Atalanta* の役割—」,
『名古屋女子大学紀要 人文・社会編』2002年。

指 昭博 『図説イギリスの歴史』河出書房新社, 2004年。

富山太佳夫 『笑う大英帝国—文化としてのユーモア』岩波新書, 2006年。

長島伸一『大英帝国 最盛期イギリスの社会史』講談社, 1989年。

姫岡とし子『ヨーロッパの家族史』山川出版社, 世界史リブレット117, 2008年。

福澤諭吉, 斎藤孝編訳『現代語訳 福翁自伝』ちくま新書912, 筑摩書房, 2012年。

船岡末利編訳 『ロチのニッポン日記—お菊さんとの奇妙な生活』有隣堂, 1979年。

ヘンリー・メイヒュー『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』松村昌家, 新野緑編訳, ミネル
ヴァ書房, 2009年。

松村昌家編『パンチ』素描集 19世紀のロンドン』, 岩波文庫, 1999年。

松村昌家 『十九世紀ロンドン生活の光と影 リージェンシーからディッケンズの時代へ』世
界思想社, 2003年。

松村昌家編 山口恵利子, 福田真人, 中島俊郎, 大田垣裕子『日本とヴィクトリア朝英国—
交流のかたち』大阪教育図書株式会社, 2012年。

「時事新報」明治25年（1892年）7月14日，第3394号。
福澤研究センター通信 第16号 2012年3月31日発行版。

原稿受領日：平成25年10月2日；Received 2 October 2013
掲載受理日：平成25年11月12日；Accepted 12 November 2013